

## 大学教育のなかの「グローバル人材」

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授

### 石井洋二郎

いしい ようじろう

1980年東京大学大学院人文科学研究科修了。  
東京大学助教授を経て、94年から現職。著書  
に「フランス的思考」「異郷の誘惑」など多数。

いま、ビジネス界や官界などを中心に「グローバル人材」の重要性が語られ、その養成機関としての大学の役割に期待が高まっている。また、それに伴って大学に対するさまざまな「注文」も増えてきた。

しかしそもそも「グローバル人材」とは、何なのであろうか。もし大学に、「英語を使いこなし、ビジネスの最前線に放り込まれてもやっていける即戦力的人材の養成」が求められているのだとしたら、ちょっと待ってほしい。実践的な英語能力の重要性は今や誰も否定できないが、それが単にコミュニケーションツール、ビジネス言語としての英語を指すのであれば、専門の語学学校でも学べるだろう。大学が担うべき役割は、これとは少し違うはずだ。

大学の使命は、端的にいえば、現代社会が直面する諸問題に対処できるだけの知識や能力を学生に身につけさせることであり、そのためにはまず、日本語できちんと筋道をたてて思考し表現することを教えなければならない。日本語で十分な思考もできないままに表現手段だけを学んでも、決して世界で通用する「グローバル人材」にはなりえないだろう。

また、グローバル化はともすると英語化と同一視されがちだが、世界には英語圏中心の報道からでは見えないものがたくさんある。英語を相対化することで初めて理解できることも少なくない。そんな複眼的視野を備えた人材こそが、ビジネスの論理とは異なる、大学が養成すべき「グローバル人材」なのではないか。

「大学の国際化」についても同様のことがいえる。留学生を増やすために英語による授業だけで学位を取れるようにする大学が最近増えていて、東大もその一つである。しかし、留学生には同時に日本語を学び、日本の社会や文化についての理解を深め、日本での生活を楽しむことに意義を見出してほしい。そうでなければ、わざわざ日本の大学で学ぶ意味はない。

以上のような基本的姿勢に立つかぎり、日本人学生と留学生が同じ教室で学ぶ機会が増えることには大いに意義がある。しかし英語で教えることにエネルギーを注ぐあまり、大学が日本語による本来の教育をおろそかにしてしまっただけでは本末転倒である。そのバランスをとりながら「国際化」を進めていくことはきわめて困難であるが、現場の教員たちはいま、この課題に全力で取り組んでいるのだということを、ぜひ理解してほしい。■